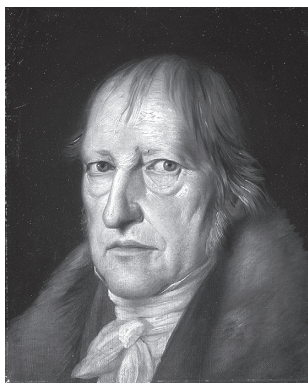


はじめに

ヘーゲル哲学の「流動性」

「ヘーゲルの哲学」と聞いて、皆さんは何を思い浮かべるだろうか。もちろん本書は予備知識を前提としない入門書であるから、全くイメージがないという方もいるかもしれない。しかし、哲学に興味のある読者の皆さんには、「西洋近代哲学を完成する壮大な体系を打ち立てた哲学者」というイメージが浮かんだ方も多いのではないだろうか。

実はこの「体系の完成者」というイメージは、一九九〇年代にはすでに研究者の間では過去のものとなっていた。^{*}それでも、「デカルトが創始した合理的な近代哲学と、その対抗馬たるジョン・ロックのイギリス経験論をカントが総合し、ヘーゲルがそれを改良、完成させた。これを批判するところからマルクス、ニーチェを経て現代へと連なる現代哲学が展開された」という教科書的なストーリーの図式的なわかりやすさには、^あ抗いがたい魅力がある。このストーリーが、「カレー」とんかつを合わせてカツカレーを作るように、あるテーゼ（正）と、そ



ヘーゲル (1770~1831)

れに対立するアンチテーゼ（反）をアウフヘーベンして、総合的なジンテーゼ（正）へと至る。ヘーゲルはこれを弁証法として定式化した」という単純化されたヘーゲルのイメージと結びつくと、どうしても「西洋近代哲学の完成者ヘーゲル」という幻想が復活してきてしまう。

西洋近代哲学の完成者ヘーゲルというイメージが根強いのは、これに加えてもう一つ理由があるように思われる。それは、「完成者」としてのヘーゲル像に代わる、新たなわかりやすいヘーゲル像が存在しないということだ。ヘーゲルが実は何かを完成してなどいないのだとしたら、結局ヘーゲル哲学とは何だったのか？ それをつかむための「取っかかり」すらない状況が続けば、一握りの研究者を除く多くの人々がヘーゲルから関心を失ってしまうのも無理はない。その結果、「完成者」という古いイメージだけが、いまだに一人歩きしているのではないか。

私は本書で、その「取っかかり」として、「流動化する、ダイナミックな体系を作ろうとした哲学者」というヘーゲル像を提案したい。もちろん私も、ヘーゲル哲学を一言で要約するこ

とがいかにも乱暴なことかは理解している。実際、ヘーゲル哲学には、この言葉だけでは汲み尽くせないさまざまな側面がある。それでも、新たな入門者にとっては、どうしても「取っかかり」となるようなイメージが必要だ。そして入門書の使命の一つは、その「取っかかり」を提供することにあるだろう。

いま「取っかかり」と言ったが、この言葉は、ヘーゲル哲学を一言に要約してしまうことへの逡巡しゆんしゆんを表現するために選択したものである。くれぐれも、本書がヘーゲル哲学の全てを最終的に明らかにした、とは受け止めないよう、注意してほしい。本書が提示するヘーゲル像は、皆さん一人一人が自らヘーゲルのテクストと格闘し、自らのヘーゲル像を作り上げるための「取っかかり」にすぎない。

なぜ「流動性」か

それにしても、なぜ流動性が重要なのだろうか。これはもちろん本書の全体を通じて論じていく課題ではあるのだが、あらかじめ大雑把なイメージの次元で、この概念に注目する理由を示しておきたい。

ヘーゲルのテクストは難しい。私事で恐縮だが、地方の公立高校で受験勉強しかしていなかった私が初めてヘーゲルの著作を開いたのは、大学生になってからのことだった。『精神現象

「学」の序文と序論の難しさに辟易^{へきえき}して読み飛ばし、「感覺的確信」と題された本論に進むと、これが輪をかけて読みにくい。世界にはこんなにも難しい書物が存在するのかと、そして人間はこんなにも読みにくい文章を書くことができるのかと驚いた。そもそも文章を読んでいようにすら思われず、かろうじて文字が書かれているということだけがわかる、そんな感覺を味わった。卒業論文こそ暗中模索の中でどうにか書き上げたものの、ヘーゲルを「読んでい」という感覺を持てるようになったのは、修士論文を書き上げたころだったように思う。

しかし、ここからが重要なのだが、「読める」あるいは少なくとも「読んでいよう」に感じられる」ようになってからも、現在に至るまで、ヘーゲルのテキストを読むことには、ほかの著者の著作を読むときとは異なる、独特の感覺が伴っている。ヘーゲルを読んでいると、文字や文章そのものが、モゾモゾと動き出すような感覺に襲われるのだ。これは、ほかの多くの哲学者のテキストや、あるいはそれ以外の文章一般を読むときにはない感覺である。もちろん実際に文字が動いているわけではない。そうではなくて、ヘーゲルの思考のダイナミズムがそのまま文章に投影されているように感じられるということだ。ヘーゲルは同じ概念を何度も何度も検討し、その意味を明らかにしていく。油断していると、同じ言葉が——同じ段落の中ですら——違う意味で使われることもある。これは読者泣かせであるし、現代の文章の書き方のルールからすれば御法度でもある。しかしヘーゲルが「読める」ようになってくると、これが著

者ととともに思考するよう読者を促すための「仕掛け」だということがわかってくる。

これこそが、本書が注目する「ヘーゲル哲学の流動性」である。この「流動性」の感覚をつかむことが、ヘーゲル哲学に入門するためにはどうしても必要なのではないか。あるいはそれが言いすぎだとしたら、少なくとも「流動性」に着目することが、私自身にとってそうだったように、ヘーゲル哲学を理解するための「取っかかり」として有効なのではないか。この仮説に基づき、本書は書かれている。

二つのヘーゲル批判

私が流動性を強調するもう一つの理由として、「硬直した体系」という正反対のイメージがヘーゲルにつきまといっていることが挙げられる。二〇世紀以後の哲学史においてヘーゲルに向けられた二つの批判は、そのことを象徴している。一つは、英語圏を中心に現代まで展開されてきた分析哲学の創始者の一人、バートランド・ラッセルによるものである。そしてもう一つは、フランス現代思想の最重要人物、ジル・ドゥルーズによるものだ。^{*2}

ラッセルはヘーゲル哲学を、合理的かつ精神的な単一の絶対的実在として世界を把握するものとした。その上で、彼自身の「論理的原子論」の立場を背景に、このような描像は私たちの認識の実態に合わないとした。一方のドゥルーズは、ヘーゲル哲学は「差異」を捉えること

のない同一性の体系であるとした。いずれの批判においても、ヘーゲル哲学は閉鎖的かつ硬直した体系の中に全てを押し込める窮屈な哲学だと見られているように思える。こうした見方は、「近代哲学の完成者ヘーゲル」や「ヘーゲル弁証法Ⅱ正反合」という古いヘーゲル観に親和的でもあるだろう。

ここで、二〇世紀の哲学史に興味を持つ読者に向けて、簡単な補足を加えておこう。ラッセルのヘーゲル批判の背景には、一九世紀末から二〇世紀初頭にかけて、「イギリス観念論」とも呼ばれるヘーゲル主義哲学がイギリスで隆盛を誇っていたことがある。また、ドゥルーズの批判を正確に理解するには、コジエーヴやイポリット、コイレらによる、二〇世紀フランスにおけるヘーゲル受容を丹念に追いかける必要があるだろう。これらはいずれも、二〇世紀の哲学史を考える上で興味深いエピソードであり、その内実には検討の余地がある。しかしそれを検討することは、本書の主題ではない。ここではむしろ、ラッセルやドゥルーズの批判がさらに単純化されて理解され、それが「近代哲学の完成者」や「硬直した閉鎖的な体系家」というヘーゲル像の再生産に寄与したことを強調したい。

これらの批判によって想起される「硬直した体系」のイメージは、本書で提起する「流動性の哲学者」としてのヘーゲル像の対極にある。ここに、ヘーゲル哲学の「流動性」の側面を強調したいと私が考える二番目の理由がある。「硬直した体系」という先入見のゆえに、「流動

性」の側面は、ヘーゲルを読み慣れない者にとってとりわけ見落とされやすく、必要ないものがある。しかも、「流動性」の側面を把握しておくことは、ヘーゲルを読むにあたってぜひとも必要なことなのだ。それゆえ、ヘーゲル哲学の特徴として流動性を強調することによって、ヘーゲルへのよくある、かつ重大な誤解を解くことができる考えた。

ヘーゲルの「主著」とは？

さて、本書では、ヘーゲルの二つの主著、『精神現象学』と『大論理学』を扱う。しかし、『精神現象学』はともかく、『大論理学』の知名度は他の著作にも劣る。おそらく一般にヘーゲルの著作として広く知られているのは、『精神現象学』『法の哲学』『歴史哲学講義』の三つで、『美学講義』や『宗教哲学講義』『哲学史講義』がそれに続く、といったところではないだろうか。このため、なぜ『精神現象学』と『大論理学』を扱うのかについては述べておく必要があるだろう。

その最大の理由は、ヘーゲルが生前にまとまった研究書の形で公刊した書籍が、『精神現象学』と『大論理学』の二つだけであり、それゆえこの二冊がヘーゲルの主著と見なされるべきだということだ。これら以外のヘーゲルの著作は、「生前にまとまった研究書の形で公刊した書籍」とは言えない。ヘーゲルの著作についての入門を兼ねて、その理由を述べたい。

まず、『法の哲学』について。この書物は、大学の授業のための教科書である。現在普及している岩波文庫版の表題『法の哲学——自然法と国家学の要綱』を注意深く読むとわかるが、この著作はあくまでも「要綱」なのだ。そのため、非常に簡潔な叙述スタイルがとられている。しかも、この著作には詳しい「補遺」がついているのだが、この「補遺」は、ヘーゲル自身の手になるものではなく、講義を聴講していた学生たちのノートをもとに、ヘーゲルの没後に編纂されたものである（学生時代の私などは「本文はわからないが補遺はわかりやすい」という感想を持っていたが、その後「ヘーゲルが書いた文章はわからないが弟子による解説はわかる」ということでしかなかったと知って軽い絶望を覚えた）。もちろんこの著作は、ヘーゲルの法哲学や政治哲学を理解する上では最重要の著作であるし、ヘーゲルの考えを知る非常に重要な手がかりとなる書物である。しかし、「主著」や「まとまった研究書」と呼ぶには心許ないのもまた事実である。

『法の哲学』と同様の成立事情を持つ著作に、『エンチクロペディー』がある。これは「論理学」「自然哲学」「精神哲学」の三部門に分かれた、射程の広い著作だ。岩波書店版の全集では『小論理学』『自然哲学』『精神哲学』と別々の著作のようになっていたため、こちらのタイトルをご存じの読者もいるかもしれない。この『エンチクロペディー』も、『法の哲学』と同じく、講義で補足することを前提に、簡潔なスタイルで書かれている。そして詳しい「補

「遺」は、ヘーゲルの没後に編纂されたものだ。さらには、こちらにも正式タイトルは『哲学的諸学のエンチクロペディー要綱』と、「要綱」が入っている。したがってこの書物も、ヘーゲル哲学を知るのに非常に重要な資料ではあるが、それでも主著と呼ぶには心許ない。

次に、各種講義録について述べたい。『歴史哲学講義』や『宗教哲学講義』のように末尾に「講義」と付く諸著作は、その名のとおりに講義録である。これらはもともと、ヘーゲルが急逝したのちに、友人や弟子たちの手によって、講義録を再編集して作られたものである。したがってこれらは厳密にはヘーゲルの「著作」ですらない。しかも講義録の編纂は、約一〇年にわたる複数回の講義をパッチワーク的に組み合わせるといふ方法で行われたことが明らかになっている。近年ではこのことへの反省に立って、講義を聴講した学生の筆記録やヘーゲル自身によるメモが本にまとめられて新たな全集として公刊され、文献学的な研究が進められているが、これらもヘーゲルの「著作」でないことに変わりはない。しかも、その全貌はいまだ明らかに^{*}なっていない（その証拠に、二〇二二年には、新たに講義ノートが五箱分も発見されたというニュースもあった）。

これらの教科書類と講義録のほかに、短い論文や草稿、また書簡なども残されている。これらももちろんヘーゲルが考えていたことを知るための重要な資料であるが、これらが「主著」にあたらないことは説明不要であろう。

したがって、ヘーゲルが研究書として読まれることを念頭に執筆した、かつまとまった分量を持った著作は、『精神現象学』と『大論理学』の二つしかないのである。ヘーゲル哲学にアプローチするにあたって、これら二冊を主著として扱うことは少なくとも恣意的な選択ではなく、むしろ自然なことである。なお、『精神現象学』と『大論理学』の概要と位置づけについては、第一章および第四章でそれぞれ詳述する。

なぜヘーゲルは難しく書いたのか

本書では、読者の皆さんに、ヘーゲル哲学の内容をかみ砕いてお伝えするだけでなく、「ヘーゲルを読むこと」の面白さを肌で感じていただくことも目指したい。このため、ここでヘーゲルを楽しんで読むための留意点についても述べておこう。

一度でもヘーゲルの文章に自力で挑戦したことのある方ならご存じだろうが、ヘーゲルの文章は非常に読みにくい。読み慣れてくると、その読みにくさの中にヘーゲルなりの試行錯誤の跡を感じることもできるようになるのだが、そう言われても初心者のうちには泣かされることの方が多い。というより、泣かされない箇所を探す方が難しいだろう。

こんな脅すようなことを言うのは、読者の皆さんのモチベーションを削ぐためではない。むしろその逆である。もしあなたがヘーゲルの著作に挫折したことがあるとしても、あるいは本

書を読み進める中で、ヘーゲルから引用された文章が意味不明に思われたとしても、それはあなたの能力不足のせいではない。ヘーゲルは、初学者が一読してわかるように書いてくれているのだ。もし最初から意味がわかった方がいれば、申し訳ないがあなたはほぼ確実に誤読している。むしろ意味がわからなかった方こそ、文章の読み方の基本が身につけていると言ってよい。安心してほしい。

ヘーゲルの文章はなぜこんなにも難しいのか。想像するしかないのだが、ここでは三つの可能性を考えてみたい。一つ目は、ヘーゲルは途方もなく文章が下手だった、というものだ。もし現代日本の大学で、学生がヘーゲルのような文章で卒業論文を書いてきたら、間違いなく全文の書き直しを命じられるだろう。現代の文章作法では、自分の言いたいことを、なるべく誤解のないように、正確に読者に伝えることが最重要視される。この観点から言えば、ヘーゲルの文章は落第である。

しかしこの「ヘーゲル文章下手仮説」はおそらくあたらないだろう。このように考える理由として（さすがにそうは考えたくないということのほか）、ヘーゲルの文章が常に凶悪なまでに難解なわけではない、ということが挙げられる。例えば初期に政治的なパンフレットとして書かれた草稿「ドイツ憲法論」などの文章は、流麗な文章かということはお措くとしても、『精神現象学』や『大論理学』のような難解な文章ではない。

二つ目の可能性として、論じられていることからの複雑さゆえに、どうしても難解になってしまうのだ、ということが考えられる。この仮説は間違っていると言えないが、それだけでヘーゲルの文章の難しさを全て説明することはできない。ヘーゲルの文章の難しさの何割かは、格闘した問題の難しさに由来する。しかし、本当にそれだけだろうか。例えばヘーゲルに先行するカントの文章も難解で「悪文」と言われることもあるが、読者になるべく誤解されないように書くという努力は感じられる。これに対して、ヘーゲルにはそうした努力の形跡があまり認められないのである。なお、外国の哲学書の読みにくさは、翻訳者の責に帰せられることがしばしばあるが、少なくともヘーゲルについてはこれもあたらない。ヘーゲルの文章はドイツ語で読んでも読みにくい。

第三の可能性は、ヘーゲルはわざと難しく書いている、というものだ。そうはいつでも、読者に意地悪をしようとしているわけではない。そうではなくて、ヘーゲル哲学の難解さは、哲学的思考のプロセスを言語で表現するための、ヘーゲルなりの工夫に由来しているように思われる。しばしば論理的な明晰めいせきさは、文章の巧みさとしての「レトリック」と対比される。この言葉を使えば、ヘーゲルはロジカルさを犠牲にして、自分なりのレトリックを追求していると言つてよいかもしれない。

このことは、本書のテーマである「流動化」にも関わる。ヘーゲルの書く文章は、なかなか

焦点が定まらず、像を結ばない。これは、難解なレトリックによって読者の思考をぐらつかせ、流動化させることが、哲学的な思考を展開する書物にはどうしても必要だ、とヘーゲルが考えていたためではないか。

なお、私はこのヘーゲルのやり方に敬意を払い、一定の意義を認めるが、しかし哲学書の文体としてどのようなものがふさわしいかという問題について、完全にヘーゲルに合意しているわけでもない。その証拠に、私自身の文章ではヘーゲルのような難解な書き方を採用していない。その理由は、どれだけロジカルな明晰さを追求しても、複雑な事象に正面から向き合う限り、難解で思考をぐらつかせられる、流動的な箇所は残ると考えるからである。むしろ明晰な文章を追求すればするほど、どうしても明晰に書くことができない部分、最も流動的な部分がいわば浮き彫りとなって姿を現してくる、というのが私の考えだ。したがって、哲学的思考の流動性を文章で表現するべきであるというヘーゲルの考え方（だと私が理解するもの）には共感するが、その手段として難解なレトリックが最適であるとは考えていない。

さて、ヘーゲルの読み方という問題に戻ろう。一人の書き手として同意するか否かにかかわらず、ヘーゲルが難解なレトリックを採用している以上、読者としてはそれに付き合わざるをえない。ヘーゲルが仕掛ける流動化のレトリックになるべく辛抱強く寄り添い、自分自身の思考がぐらつく感覚を味わうことができたとき、ヘーゲルの文章から最も多くの教訓を引き出す

ことができる。

私自身、ヘーゲルを読むことは「コストパフォーマンスが悪い」のではないかと悩んだこともある。たしかに、ヘーゲルを読むのは難しく、その意味で「コスト」がかかる。しかしじっくりと付き合えば、かけたコストに見合う「パフォーマンス」を得ることができる。そのことを理解するためにも、ヘーゲルが何を狙ってこんなにも難解な文章を書いたのかに気づく必要がある。そしてそれに気づくためにも、「流動化」の重要さを知っておくべきである。

本書の構成

以上で本書の方針は十分明らかだろう。第一に、本書ではヘーゲル哲学の「流動性」という側面に光をあてる。そして第二に、本書ではヘーゲルの主著である『精神現象学』と『大論理学』を主に扱う。これによってヘーゲル哲学へのよくある誤解を解き、初学者がヘーゲル哲学にアプローチするための「取っかかり」を提供したい。以下、本書のあらましを予告しておく。

第一章から第三章では、『精神現象学』を扱う。この第一の主著の「序文」では、「流動性」と「流動化」が印象的な仕方が登場する。第一章ではこのことを確認したい。第二章では、私たちの認識についてヘーゲルが『精神現象学』で論じている箇所を取り上げる。また第三章では、行為についての議論を取り上げる。これらを通じて、『精神現象学』の中に見出せる流動

性を明らかにしたい。

第四章から第六章では、『大論理学』に焦点を定める。『大論理学』は、「存在論」「本質論」「概念論」という三つの部分に分かれている。本書もこれに合わせて、第四章では「存在論」、第五章では「本質論」、第六章では「概念論」を扱う。『大論理学』はヘーゲル哲学の理論的支柱となっている著作でもある。この三章を通じて、この著作の全体を流動性が覆っていることが理解されるはずである。

これらに加えて、第七章では現代のヘーゲル解釈として、フランスのカトリーヌ・マラブーが『ヘーゲルの未来』で展開した解釈と、アメリカのロバート・ブランドムが『信賴の精神』で展開した解釈を取り上げる。これら現代のヘーゲル解釈においても、ヘーゲル哲学の流動性という特徴が重要な役割を果たしている。

最後にヘーゲルのテキストとその引用について触れておきたい。本書ではヘーゲルからの引用を多用しているが、それらは基本的に全て私自身が訳出している。その上で、現在標準的となっているドイツ語版全集 *Gesammelte Werke* (Felix Meiner 社刊) の巻数・頁数を示した。対応する邦訳については、本書の執筆時点で読者が入手しやすいものという観点から、『精神現象学』についてはちくま学芸文庫版の『精神現象学(上・下)』(熊野純彦訳、二〇一八年)を使用し、その上・下の別と頁数を示した。『大論理学』については知泉書館から公刊されている

新しい「ヘーゲル全集」の巻数と頁数を示した。頁数は、洋書についてはアラビア数字、和書については漢数字を用いた。ヘーゲル以外のテキストについてはそのつど註などで出典を示している。引用文中の中略は「…」、原典にない補いは「〔 〕」内にいずれも小字で示した。傍点は原典における強調（イタリック）である。

また、ヘーゲルを読み慣れない多くの読者に配慮して、『精神現象学』と『大論理学』の目次を付し、本書で取り上げた箇所を示しておく。目次については、本書で触れた箇所は細かなところまで表示し、触れていない箇所については大幅に簡略化している。